追試研究に特化した専門雑誌『会計科学』

研究・イノベーション学会
第36回年次学術大会
企画セッション「挑戦する日本の学術誌」
2021年10月29日（金）

報告者：会計科学副編集委員長　北田智久

自己紹介

北田智久（きただともひさ）

- 所属：近畿大学　経営学部
- 専門：会計学（とくに原価計算や管理会計）
- 2020年度の創刊時より『会計科学』副編集委員長を担当
- 2018~2020：日本原価計算研究学会　学会誌編集委員

報告の流れ

『会計科学』に関する簡単な紹介

↓

会計研究における再現性の問題を
扱った研究（Hail et al. 2020）の紹介

↓

『会計科学』の意義や今後の展望

『会計科学』とは？

追試に特化した国内初の会計研究の雑誌

- 若手研究者が主体で運営

創刊に至る背景

- **研究結果の再現性の問題**から追試研究は重要だが，既存の会計学の雑誌とは趣向が合わない

AS 会計科学

追試研究を中心とした科学的な会計研究のための学術誌

研究結果の再現性の問題

他分野における再現性の問題

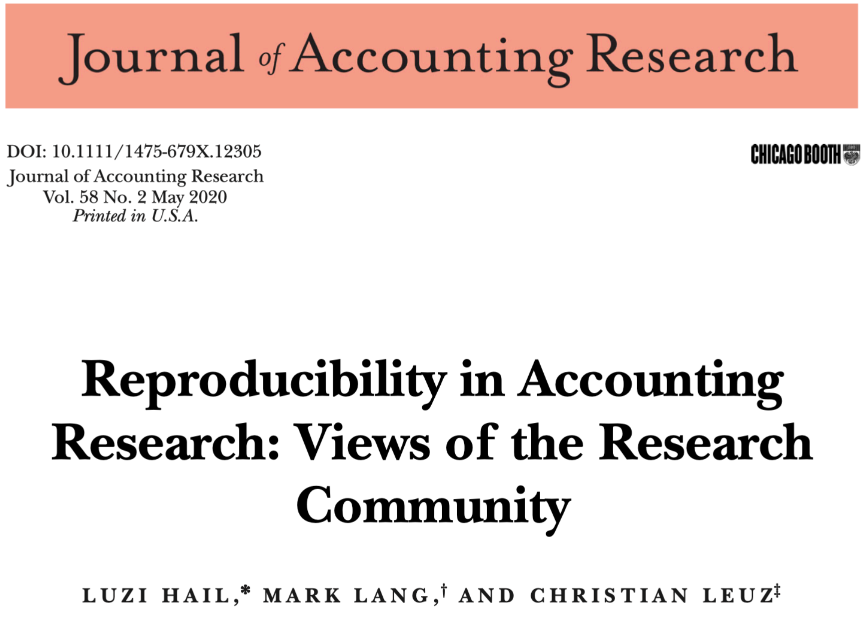
- Baker (2016)
  - Natureによるサーベイで，70%以上の研究者が他者の研究の再現に失敗との回答
- Camerer et al. (2016)
  - 実験経済学の再現性の低さを指摘

→これらの再現性の懸念は，もちろん会計研究においても同様に当てはまる

会計研究における再現性の議論

Hail, L., et al. (2020). "Reproducibility in Accounting Research: Views of the Research Community." Journal of Accounting Research 58(2): 519-543.

- JAR（会計分野のトップジャーナル）の2019年のカンファレンスより



Journal of Accounting Research

DOI: 10.1111/1475-679X.12305
Journal of Accounting Research
Vol. 58 No. 2 May 2020
Printed in U.S.A.

CHICAGO BOOTH

Reproducibility in Accounting Research: Views of the Research Community

LUZI HAIL,* MARK LANG,† AND CHRISTIAN LEUZ‡

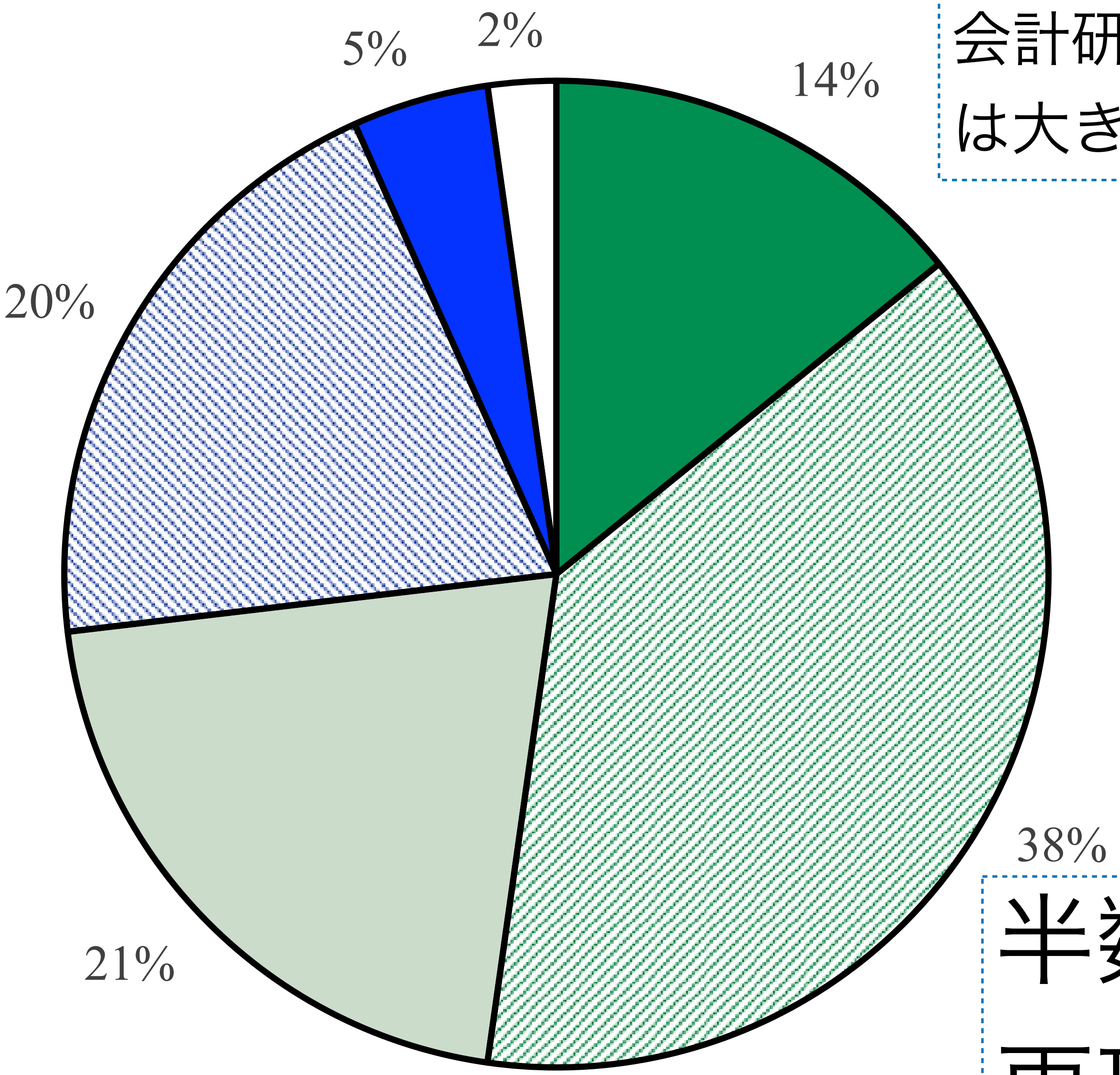
Hail et al. (2020)によるサーベイ

2019年のJARのカンファレンスへの参加者にサーベイを実施

- 会計研究者が対象
  - 回答者の約45%が教授，約19%が准教授，約28%が講師，約8%が大学院生
  - 136／167で回答率は81%
- Baker (2016)で報告された「Nature」におけるサーベイに依拠

会計学者の再現性に対する認識

Panel B: Is the lack of reproducibility in accounting research findings a major problem? (Q5)



会計研究の研究結果における再現性の欠如は大きな問題ですか？

Answers	Count
Strongly agree	19
Agree	51
Neither agree nor disagree	28
Disagree	27
Strongly disagree	6
No opinion	3
Grand Total	134

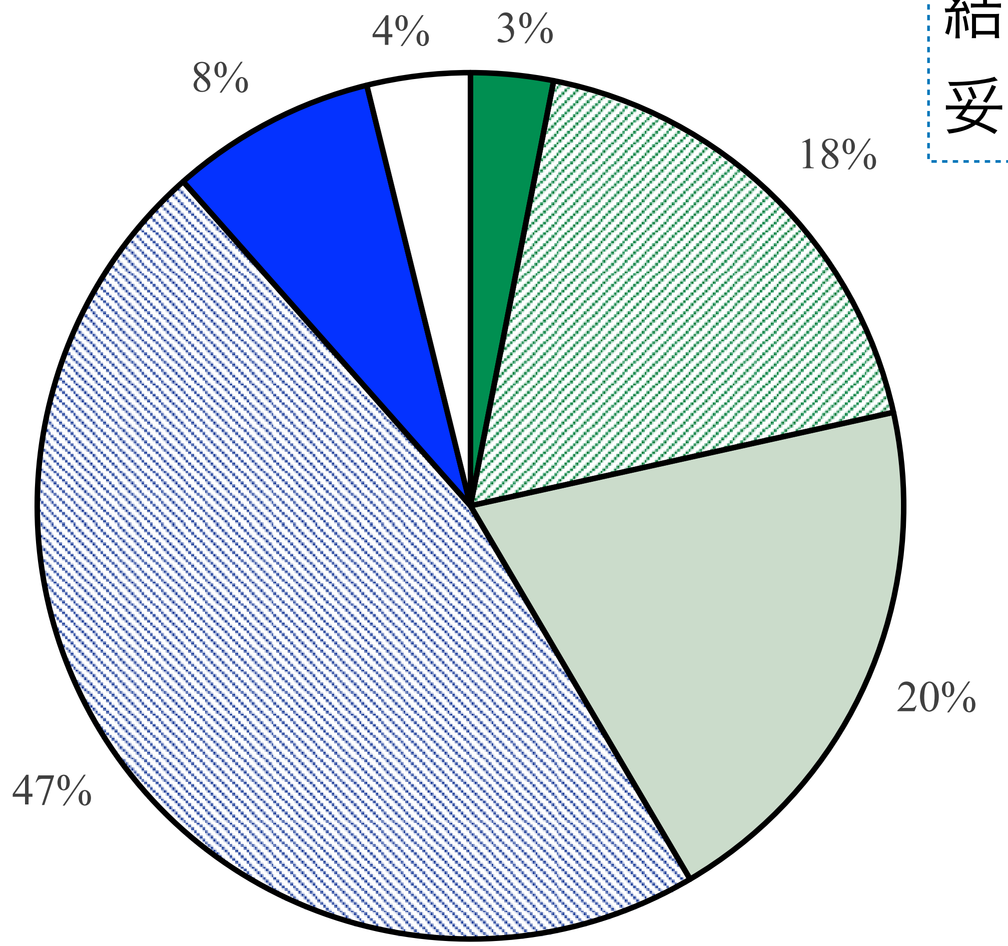
半数強が会計研究における再現性の欠如は問題と認識

出典：Hail et al. (2020, 524) Fig1

再現できない結果に対する認識

I think that a failure to reproduce [the results] rarely detracts from the validity of the original finding.

結果を再現できないことが，元の研究結果の妥当性を損なうことはめったにないと思う。



Answers	Count
Strongly agree	4
Agree	24
Neither agree nor disagree	26
Disagree	61
Strongly disagree	10
No opinion	5
Grand Total	130

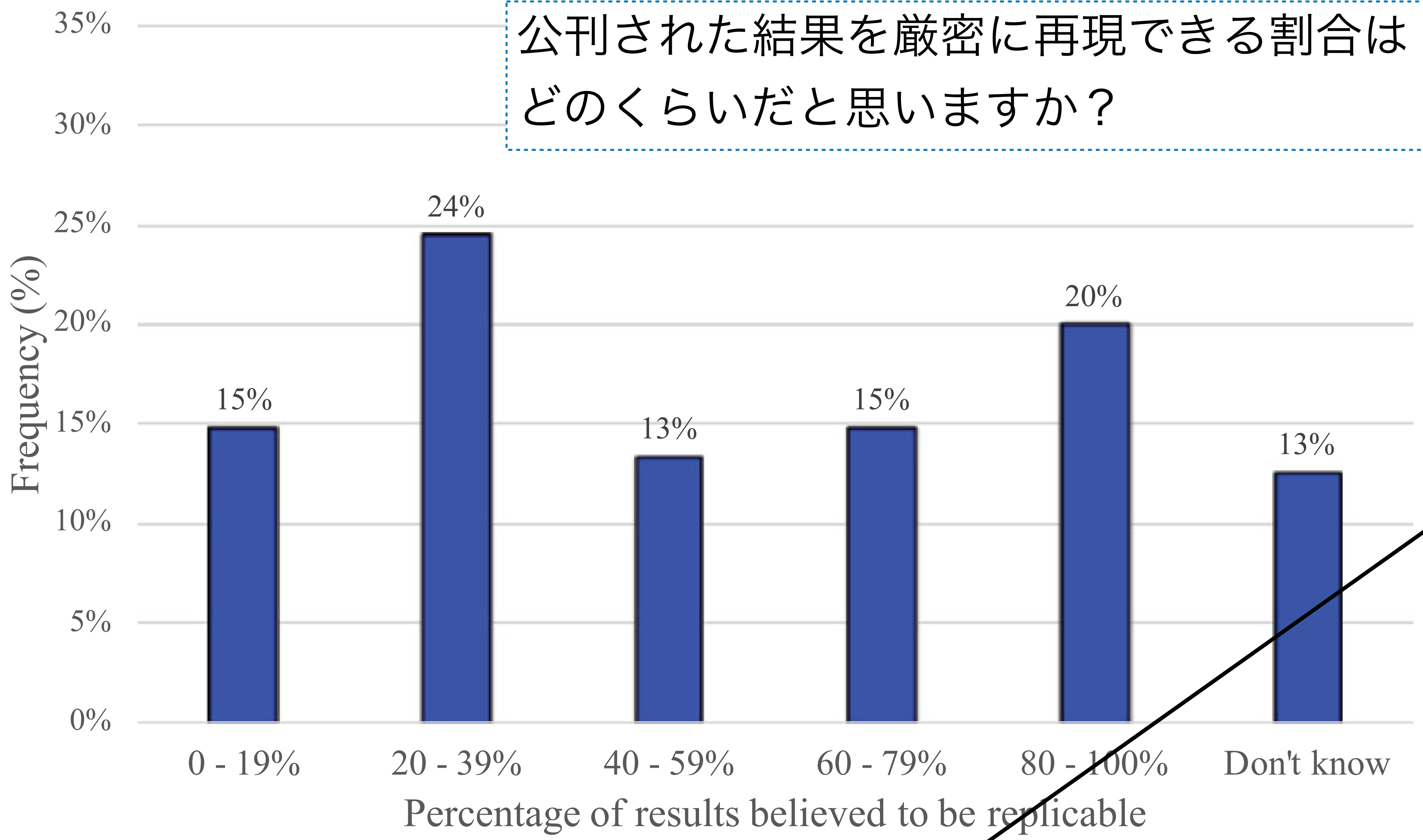
半数以上が再現性の低さは，オリジナルの研究の発見事項の妥当性を毀損すると考えている

出典：Hail et al. (2020, 529) Fig4

会計研究の再現性の程度

Panel B: In your opinion, what proportion of published results are exactly replicable? (Q2)

公刊された結果を厳密に再現できる割合は
どのくらいだと思いますか？



Answers	Count
0 - 19%	20
20 - 39%	33
40 - 59%	18
60 - 79%	20
80 - 100%	27
Don't know	17
Grand Total	135

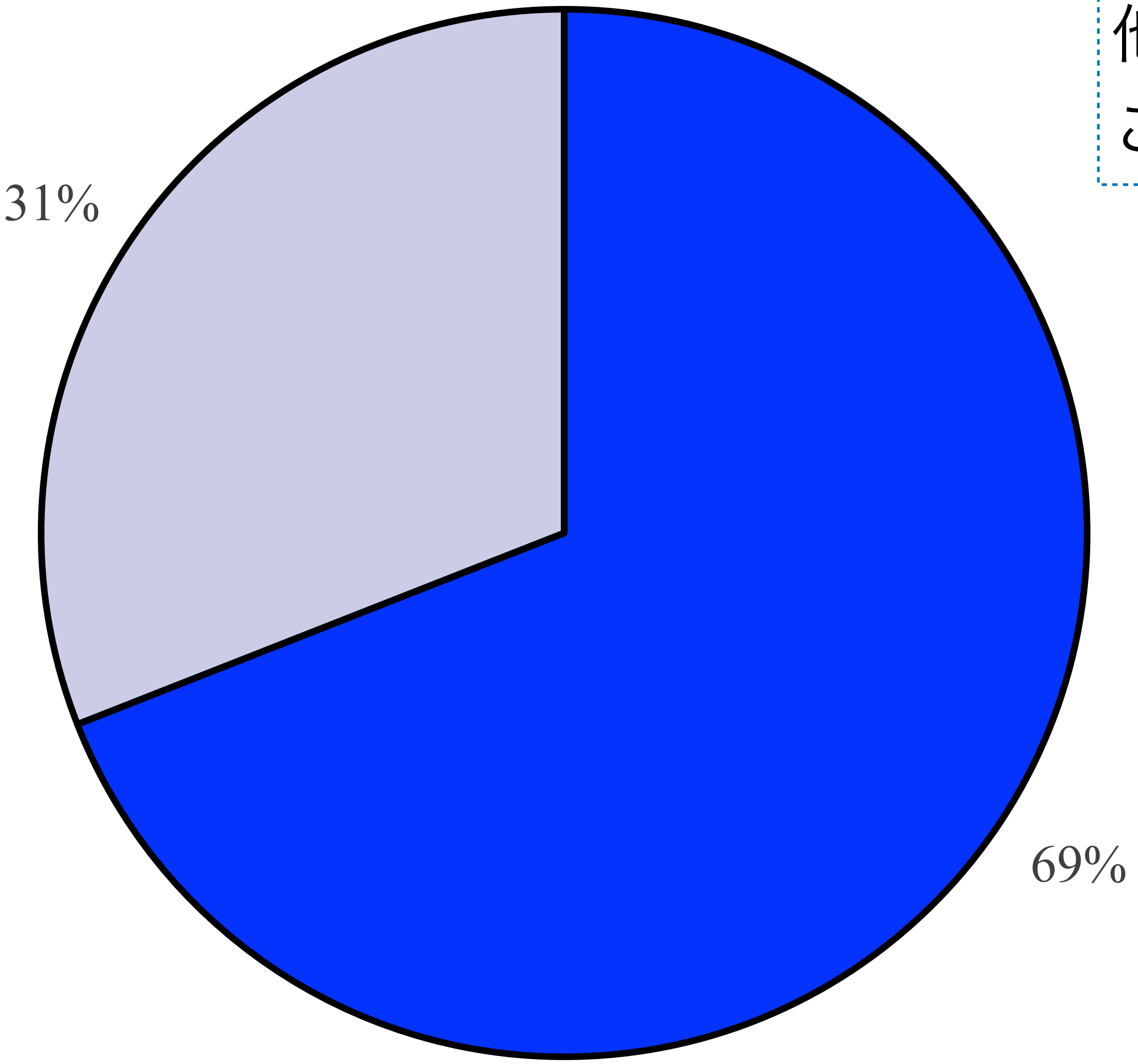
Mean	46%
Median	50%
Std. Dev.	28%

公刊された結果の半数弱しか再現できないと回答

出典：Hail et al. (2020, 526) Fig2

他人の研究の再現

Panel A: Have you tried and failed to reproduce someone else’s results? (Q14.2)



他人の結果を再現しようとして，失敗したことはありますか？

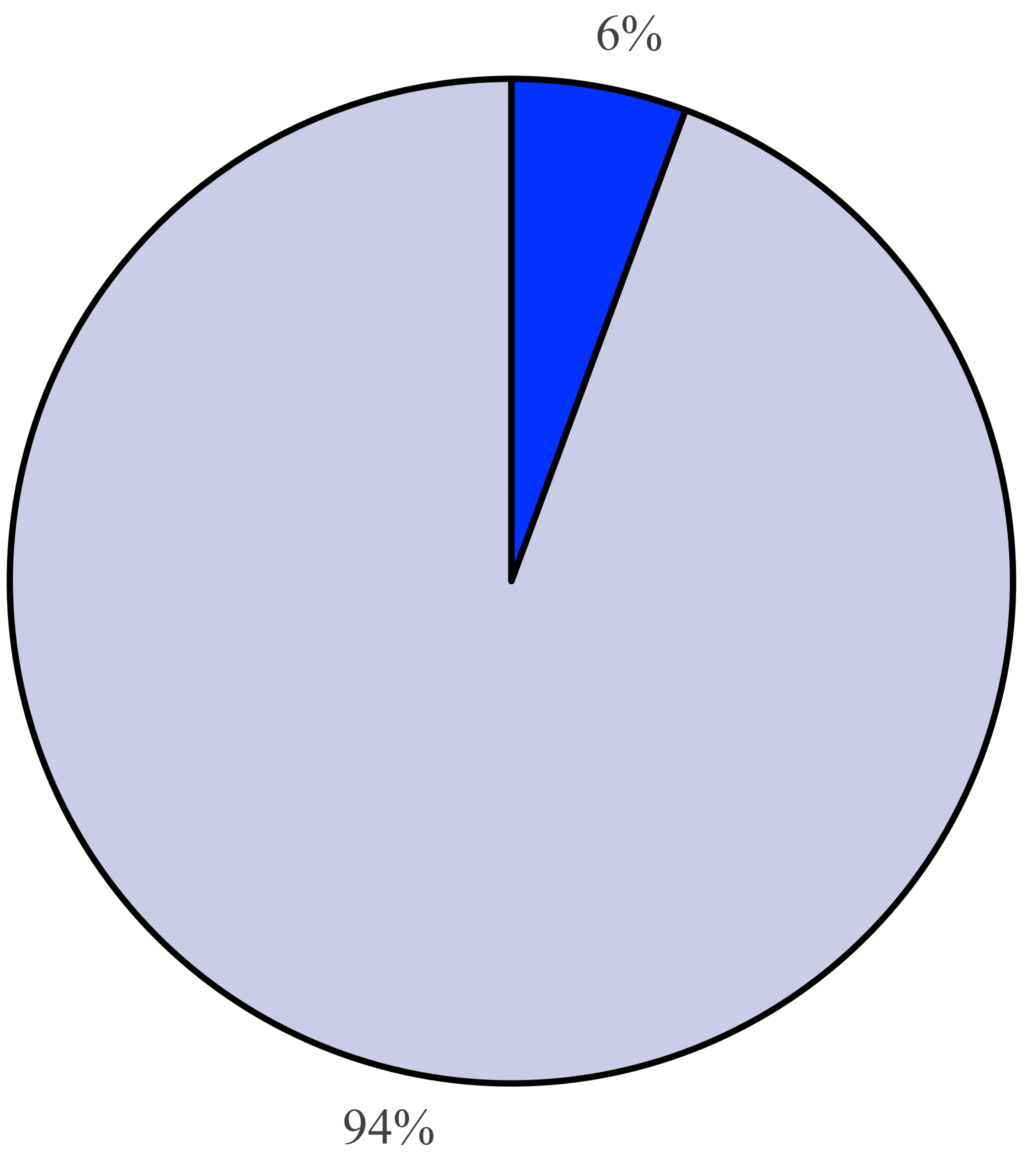
Answers	Count
Yes	87
No	39
Grand Total	126

他人の研究を再現しようとして，失敗している人は多い

出典：Hail et al. (2020, 528) Fig3

自分の研究の再現

Panel B: Have you tried and failed to reproduce one of your own results? (Q14.1)



自らの結果を再現しようとして，失敗したことはありますか？

Answers	Count
Yes	7
No	117
Grand Total	124

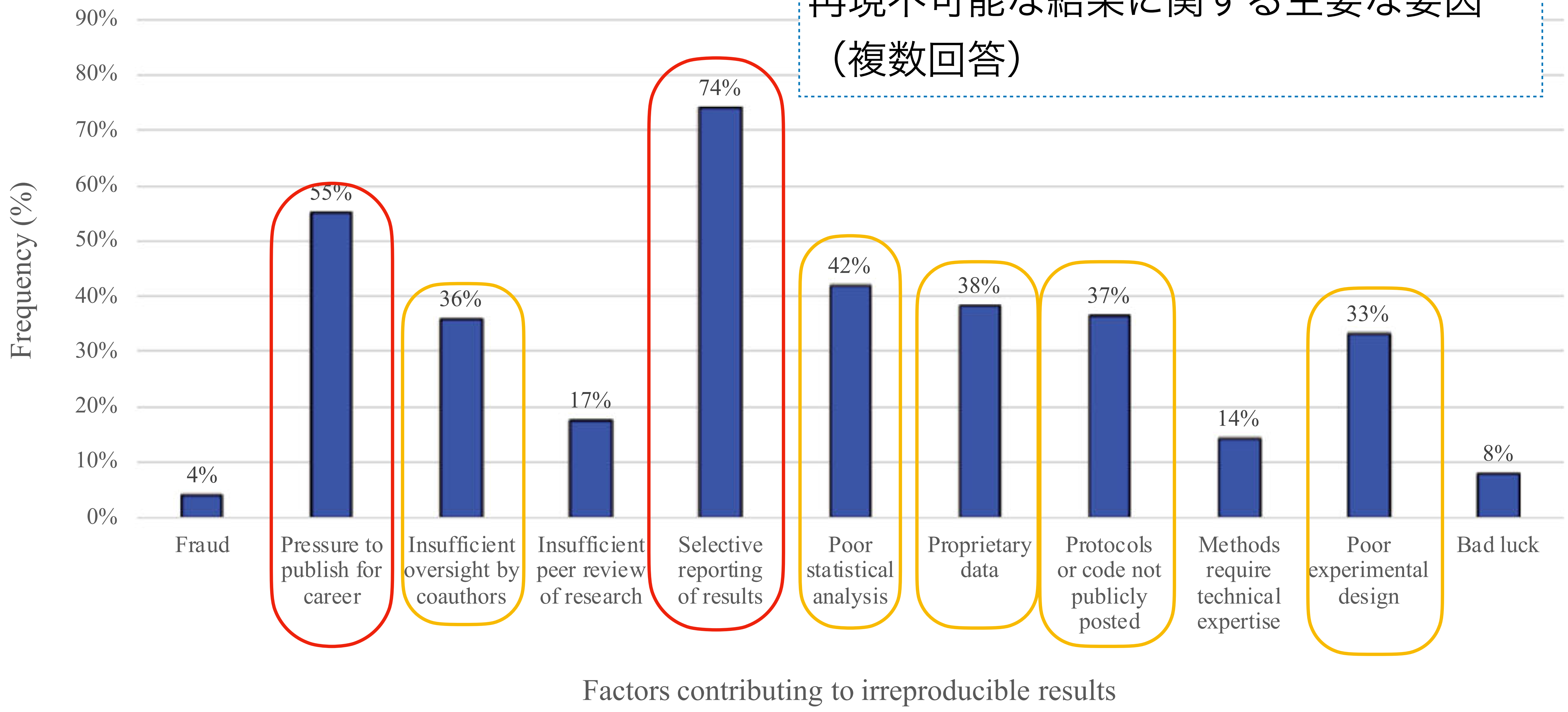
自らの結果でさえ,
6%もの人が再現失敗

出典：Hail et al. (2020, 528) Fig3

なぜ再現できないのか？

Panel A: Percentage of respondents who believe that the indicated factor *always or very often* contributes to irreproducible results. (Q12)

再現不可能な結果に関する主要な要因
（複数回答）

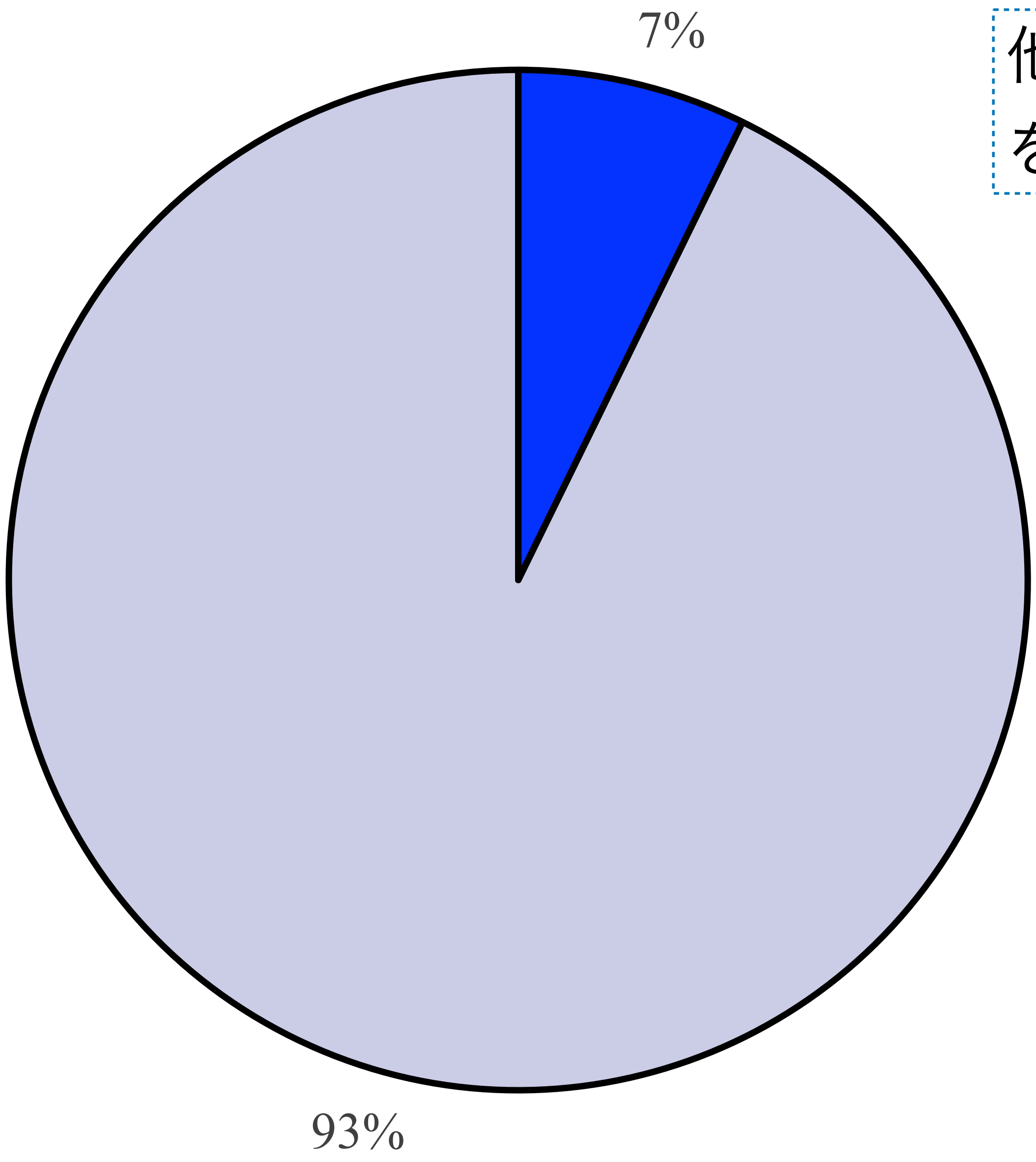


分析結果の選択的な報告や業績へのプレッシャー

出典：Hail et al. (2020, 530) Fig5

再現できなかった結果はどうなる？

Panel A: Have you published a failed attempt to reproduce someone else's work? (Q14.4)



他人の研究を再現しようとして失敗した試みをパブリッシュしたことはありますか？

Answers	Count
Yes	9
No	115
Grand Total	124

再現できなかった結果はその多くがお蔵入りとなる

出典：Hail et al. (2020, 532) Fig6

Hail et al. (2020)のまとめ

① 会計学者の間でも，先行研究の結果の半数程度が再現できないだろうという認識

② 多くの回答者が他人の結果を再現できなかった経験がある

- 自分の結果でさえ再現できないことが6%

③ 再現できないことが研究結果の有用性を損なうと認識しつつも，再現不可能な結果を見つけたとしてもパブリッシュされない

④ 業績へのプレッシャーや，選択的に結果を報告することは大きな要因

- QRPs：p-Hacking，HARking，…

再現性を高めるためには？

追試に対するインセンティブや環境の整備

- コードやデータの公開，オンラインでの追加資料の活用→他者が追試をしやすくなる
  - ただし，データは公開できないことも多い
    - 企業内部のデータ，データベースとの契約上の問題
- 既存のジャーナルが追試研究を受け入れる
  - ただし，編集委員会や査読者などの負担増
  - 研究としてのインパクトの弱さ
    - オリジナルを超えられない？

再現性を高めるためには？

Pre-registration（プレレジ）

- 実証研究の実施の前に，データの取得の仕方やサンプル・サイズ，分析方法などの詳細を第三者機関に登録し，原則的に，登録内容にしたがって研究を遂行する仕組み

Registered reports（レジレポ）

- プレレジの段階で査読を行い，「仮アクセプト」となると結果を問わず掲載される仕組み
    - 会計の雑誌でもレジレポを採用した号がある（JAR 2018 vol. 56 No.2）

再現性に関して会計学が抱える課題

国や地域によって，会計のルールが異なる

- 「利益」と一口に言っても中身が違うかもしれない

トップジャーナルの学術誌（主に欧米）にで扱われるデータは，米国企業のデータが多い

- 日本の社会システム（例：報酬制度，法律，規制，文化，etc）とは大きく異なる

『会計科学』の意義

追試に特化することで，これまで述べた再現性の問題に僅かながら貢献

- データやコード，オンライン資料の公開
- 迅速な査読によるチェック
  - 研究の独創性・新規性ではなく，追試の手続きの妥当性を重視
- 紙媒体での配布をしないことによるコスト削減
  - オンラインで論文１本ずつ公表
- 追試による学習効果
  - 特に大学院生や若手研究者

会計科学の展望

追試に特化したカンファレンスの実施

- 再現可能な結果の共有
- データ・分析ソフトの扱い方の知識共有

認知度の向上

- 積極的な情報発信
- 学会や研究会等でアピール